

2020年10月4日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「ただで受けたのだから」マタイによる福音書10章5～8節

主任牧師 加藤 誠

「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい」(マタイ10章7節)、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」(同8節)。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」。主イエスはこの言葉をもって、弟子たちを「御国の福音」を伝える働きに遣わされました。弟子たちが「ただで受けたもの」は何なのか。そして「ただで与える」とはどのような生き方が指し示されているか。そのことを今朝、聖書から聴いていきたいと思えます。

改めて考えてみると、私たちはたくさんの「ただで受けたもの」に囲まれています。第一に、命がそうです。神さまからの無償のいただきものです。そして生まれてから子どもの間、私たちは毎日「ただで受けたもの」によって育まれていきます。

「自分が飲んだミルク代は払います！」という赤ん坊はいません。すべてのものを無償で与えられて育まれるのです。そのうちにお金を手にするようになると、代金と引き換えに手に入れるものが多少増えていきますが、しかし人として生きる時に大切なもの…「愛情」「優しさ」「思いやり」そして「励まし」や「ゆるし」「祈り」などはすべて、「ただで受けたもの」ばかりであることに気づかされます。そして人生の場数を多少なりとも重ねると、「ただで受けたもの」の背後には、犠牲があり、闘いや痛みが隠れていることが分かるようになります。

例えば子育ての中で、子どもが熱を出したり、夜間に救急病院に連れて行ったりすると、つい「つぶやき」がもれてしまう時がある。そんなとき、「でも、自分も親に看病してもらったよなあ…」と、自分が「ただで受けてきたもの」に気づかされ、考えさせられました。そういう意味で考えると、私たちは「ただで受ける」ばかりでは、そこに込められた思いの有難さに気づけない。自分が「与える側」に立たされた時に初めて、自分が「ただで受けてきたもの」の大きさや尊さ、そしてその背後に隠れている犠牲や闘いに気づかされていくのではないのでしょうか。つまり、私たちは「ただで与えた時、初めてただで受けてきた真の意味を知る」のです。

ただ、今日の場面で主イエスが弟子たちに語られている「ただで受けたもの」とは、一般に私たちが生きる時に経験するものとは違って、「御国の福音」、神さまから与えられた良き知らせ、神さまとの関係において、私たちが「ただで受けたもの」のことです。それは一言でいうなら「神の愛」です。主イエスは私たち一人ひとりに「神の愛」を「ただで手渡し、ただで与えるため」に来てくださいました。主イエスは「天の国は近づいた」と宣べ伝えられましたが、それは「神の愛はあなたのすぐ近くに届けられています。その神の愛を受け取って一緒に生きていきませんか」という呼びかけです。

今朝の箇所直前で「十二使徒」として選ばれた弟子たちはもちろん、主イエスのもとに「御国の福音」を求めて訪ねてきた一人ひとりが、主イエスを通して「神の愛」を無償で受け取ったのでした。例えば十二使徒の一人である徴税人マタイは、「わたしについて来なさい」という、主イエスのたった一言に込められた深い愛に触れて、「神に向かって生きる幸い」に招き入れられました。昔も今も、人はその人の職業や肩書、収入の多い少ないで評価のレッテルを貼ります。「卑しい」職業の人は人格までも「卑しい」かのように軽んじられます。当時マタイは徴税人という職業ゆえに、まるで犯罪者のような扱いを受けていました。しかし主イエスはマタイをそのようなレッテルから解放され、神の前に愛されて大切にされているマタイであることを教えてくださり、マタイは「神の愛につながられ、神に向かって生きる幸い」に招き入れられたのです。

私たちはどんなに豊かな才能にあふれていても、お金があっても、仕事ができても、「何のために生きるのか」「どこに向かって生きるのか」を知らないなら、ほんとうの幸いを味わうことはできません。たくさんお金をためて、好きなものを手に入れて、美味しいものをたくさん食べて。でも、その人生に何の意味があるのでしょうか。「神に向かって生きる」「神の愛につながられて、神の愛を隣り人と分かち合って生きる」。神の愛につながられ、神に向かって生きる時、私たちの人生は決して朽ちることのない、実り豊かなものに変えられるのです。徴税人マタイは主イエスによって、人生で一番大切なものを「ただで受けた」のでした。もっともそのために主イエスは十字架で殺されるのですが、その十字架においてマタイを愛する神の真実の愛が、究極に示されたのです。

その「ただで受けた神の愛」を「ただで与えなさい」と、主イエスはマタイたち弟子たちに教えられました。「ただで与える」とは「売りつけるな」ということであり、「見返りや感謝を要求するな」ということです。私たちは何か少し良いこと、相手のためと思うこと、優しいことをしてあげると、心の中で何らかの見返りを求めることがあります。だから相手が感謝をあらわさないと、とたんに気分を害してしまいます。けれども、それはほんとうの愛ではありません。自分がほめられたい、良く思われたいためのパフォーマンスにすぎない。ほんとうに相手のことを愛し、大切に想うなら、今は気づいてもらえず、無視されても、主イエスが十字架の上で祈られたように、神さまにささげる思いで愛をささげていく。その時、私たちは神の愛につながられた幸いを味わう者とされていくのです。

「ただで与える」ということはほんとうに難しいことです。毎日が試行錯誤で、失敗ばかりかもしれません。けれども「ただで与えることを教えてください」と祈り願いながら主イエスに従って行く時、私たちは自分に注がれている主イエスの愛と赦しと祈りの深さをますます知らされ、神への感謝あふれる豊かな実りにあずかることができるのです。